

# “SASHIMONO” Japanese style Fine Boxes

Fine Wood Artist SUDA Kenji

指物 SASHIMONO は木を組み合わせて物を作る伝統的技法を指す日本語です。さらにその技術で出来た物も指物 SASHIMONO と呼びます。英語では **Cabinet making** と訳されるようですが、指物では茶箆筥ぐらいは作りますがキャビネットというような大きな家具はほとんど作りません。そもそも日本ではあまり家具はなかったのです。今はほとんどの家庭が西洋風に椅子とテーブルの生活ですが、本来日本人は床＝畳にじかに座り椅子を必要としません。また空間を整えるキャビネットなどに代わる「床の間」があり、建築の一部としてすでに組み込まれています。ですからその床の間に飾るものが発達しました。

絵や書をまず飾ります。それはしまうときは巻物状にしてしまう、軸と言われる形式をしています。季節やその日の行事によって掛け替えられ、欧米のように何代にもわたって同じ絵画が同じ場所に飾られるなどと言うことはありません。そして軸と共に飾られるものが「生け花」であり工芸作品です。ですから私たち日本人にとって工芸作品も絵画も同じ芸術であってそこに優劣をつけません。工芸を応用美術とか機能芸術と言って絵画などの純粋美術の下に見る欧米の価値観とは大いに違います。

このような背景で日本では工芸が大変発達しました。生活の中で使うものの形を借りて美を表現する、これが日本の伝統的美意識です。現代の工芸制作において個人の創造を基本とする芸術と、伝統という他者との関係性が矛盾なく成り立っています。ですからこのような工芸観に基づく創作活動を、**Craft** ではなく **Kougei** という日本語で表したいと思います。しかし日本でも今では多様な工芸観があり、いろいろなタイプの作品が作られています。ですが、私はそのような伝統的美意識・工芸観を大切にしたいと思っています。

工芸のなかでも、古来日本人は箱に大変興味を持ってきました。その例は神話から童話、宮殿から寺院までいたるところに見ることができます。実際に色々な素材、木や漆、金属、陶磁器でも作りました。ガラスの箱もあります。箱の中の空間こそ神秘の源なのでしょう。宇宙を閉じ込める存在、ふたを開ける事はまさに世界を覗くことに他ならないのです。

私は箱にまつわるこの物語性にとっても魅かれ今日も箱を作っています。物を収納するという機能は十分考えてはいますが、それを一番の目的とはせず、飾り、眺め、手にとって弄ぶ、まさに愛玩こそが工芸の楽しみです。少数ですがここにある私の作品からこのような世界が伝わればうれしく思います。

私はこのたび日本国文化庁より文化交流使に指名されニュージーランドに参りました。この展覧会を始めいくつかの活動と交流を通じて日本文化の一端を知っていただき、理解と友好が深まることを願っています。また一人の **Artist** として、この美しい自然と固有の歴史あるニュージーランドでの滞在が、私の制作の新たな地平を拓らく刺激となる事を期待しています。

最後になりましたが、このような素晴らしい会場で私の作品を見ていただける機会をご提供いただき、厚く御礼を申し上げます。**Objectspace** の **Philip Clarke** 氏、**UNITEC** の **Kim Meek** 氏、**Waiheke Island, Green Gallery** の伊東和子氏はじめ多くの方のご援助でこの展覧会が実現しました。また長年に亘るコレクターの横川晴氏、作品の多くをお貸しくださった石井本子氏に深甚の謝意を表します。